9 月 号

みどりを競う
　峰そめて
朝日がのぼる
　山のそら
歌えよ心も
　はればれと
ときわ東の
　まなびやに
よろこびあふれて
　鐘がなる

（校歌の一節より）

昭和59年９月１日
編集／発行
岡崎市教育委員会

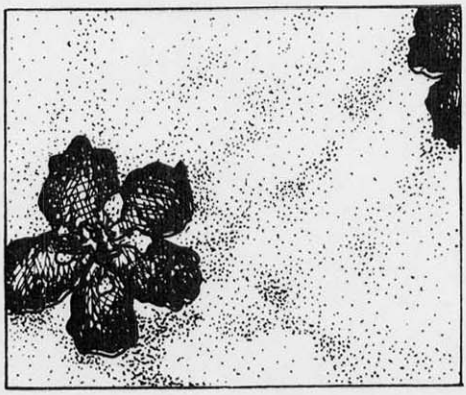
（常磐東っ子の全校鼓笛―常磐東小）

— 教育随想 —

人工水晶体による右眼開眼

石川　勤

いま、わたしの右眼の視力は、人工の水晶体によるものである。数年前から、はがきなどを書く時、真っすぐに書いたと思った行が、いつも左に傾いているのを、少しおかしいとは感じたものの、従来不精のせいもあって放置してきた。ところが、一昨年、人の勧めもあって、日本的な名医である藤田学園名古屋保健衛生大学の馬嶋先生に診察してもらったが、老人白内障のため、視力が〇・〇四にまで落ち、失明寸前ということがわかった。診断書には「水晶体欠落症」という病名が記されていたかと思う。



人工水晶体を入れる手術をすれば、視力を取り戻すことができるというので、一年三か月待った昨年の十月四日、馬嶋先生の手によって、超音波を使っての人工水晶体を入れる手術をしてもらった。手術はおよそ三十分くらいであったように思う。

手術後一昼夜は、両眼を眼帯で覆い、絶対安静であった。わたしは、手術やその結果について、何の疑念も不安もなく、専ら、どの程度見えるようになるかに好奇心を持ち、期待をかけていた。だから、周囲の人たちは、わたしの度胸のよさに驚いていたようであった。

手術後の食事も、一物も残さずきれいにたいらげたし、一昼夜、ぐっすり寝込み、付き添いの家内も、手術後どんな世話をしたか思い出せないほどであった。

翌朝、眼を覚ました時は、もう六時近くであった。しばらくして看護婦がきて、眼帯をはずし、

「どうぞ遠くを見てください。」

と言う。ベッドをおりて窓際に行き、思い切り両眼を開いた。

驚いた！　外は快晴で、紫色に輝き、まぶしい。昨日まで見えなかった鉄塔を結ぶ送電線が、くっきり視界に飛び込んでくる。屋根瓦まで数えられる。何度も何度も送電線を見直し、瓦を数えて、やっぱり視力を取り戻したのだと自分に言いきかせていた。

今まで見ていた外界は、灰色に濁っていて、現に存在しているのに、見ることのできないわたしの外界であって、それは真実の、客観的な外界ではなかった。いま見るこの紫色に輝くこの姿、これが本物の世界なのだ。

「この眼で見たのだから、間違いない。」

などと啖呵を切ることが、どんなに独断であり、思い上がりであるかを知らされた。

わたしの右眼は、人工の水晶体を入れることによって、昨日まで濁っていた外界が、これほどまでに明るく輝き、見えなかったものが、こんなに鮮明に見える視力を七十歳にして再び取り戻すことができたわけである。この強烈な喜びと感動、こうしたすばらしい体験を、わたしは教師として、子どもたちに味得させたことがあったであろうか。医学の進歩とその偉大な力に襟を正すとともに、教育者の非力を深くざんげした。

遠近に対する調節は、人工であるから十分ではないが、三十年間は保証され、いまは〇・〇四の視力が一・二まで見えるのである。

（岡崎女子短期大学副学長）

甘言苦言

教室掲示

息づかいが感じられる場に

連尺小学校　栗田　員余

「大きく力づよい字が書けました。」

「どっしりとした牛の感じをつかみ、生き生きとかけました。」

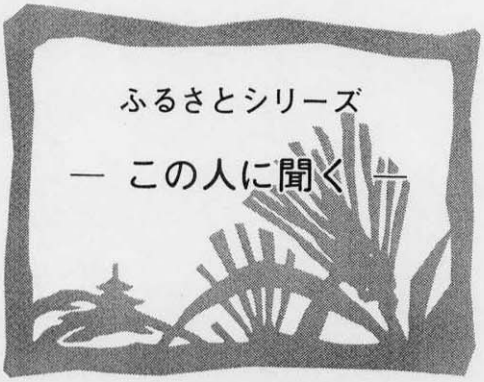
など、教師の作品評の一言半句にも子どもたちは顔をかがやかせてくれる。掲示したばかりの作品への関心は高いが、何週間も掲示されっぱなしの作品には見向きもしてくれない。

作品掲示は、忙しいとついつい遅れがちになるが、遅れれば遅れるほど書いた時の感激も薄れてしまう。いつも新鮮さを心がけることが大切である。

忙しい時は、個々の朱書きはなかなか書けないものであるが、励ましの一言は欠かせられない。

また、書けたものから全員が自分の作品を自分で張っていくのもよい方法である。張りながらお互い同士の作品を批評し合えば関心も自ずと高まっていく。

作品は新鮮なうちに掲示し、ときには



木彫師

坂本　武氏

坂本さんを自宅にお訪ねすると、仕事場で仏壇の欄間を制作中であった。仕事机の右横には百本ほどののみが整然と並び、刃先がわずかになってしまった修行時代のものもある。

坂本さんがこの道に入ったのは昭和四年、十三歳の時であった。

「将来は学校の先生か画家になりたいと思っていたんですよ。ところが、農機具製造をやっていたおやじが急に亡くなりましてね。食べていくためにやむなく学校をやめて、職人の道を選んだんです。たまたま隣の方（故太田福松氏）が彫刻師でしてね。そこへ弟子入りしたわけです。」

坂本さんの修行は七年間続く。職人根性をつくりあげたのはこの時期であった。

「夏は朝六時から夜九時ごろまで、冬は朝七時から夜十時ごろまで仕事をしました。炊事や子守りもしましたよ。逃げ出したくなったことも幾度かありました。しかし、おふくろの悲しむ顔が浮かんでくるとできませんでしたね。」

昭和十三年、二十三歳の時に独立自営に踏み切ったものの、間もなく臨時召集となった。

「戦争が終わっても、こういう仕事はなかなか軌道に乗れません。昭和二十三年ごろになって、ようやく彫刻の仕事にもどることができました。しかし、戦後の混乱で彫刻師にふさわしい仕事はなく、食べることだけに追われる日日でしたね。」

仏壇彫刻には塗箔の場合、紅松や姫小松を使う。彫りやすいということと、値段が手ごろであるという利点をもっているからである。塗箔しない場合は、少し彫りにくくなるが一位や桂や欅を使う。

木彫師として大切なことをお尋ねしてみた。

「やっぱり美しさを追求することを根本においていないとだめですね。なんとか自分で納得できるようになったのは最近のことですよ。自分なりに独特のものをつくり出すことができるようになりました。」

坂本さんは十年前ほどから、日本画の勉強をはじめられた。

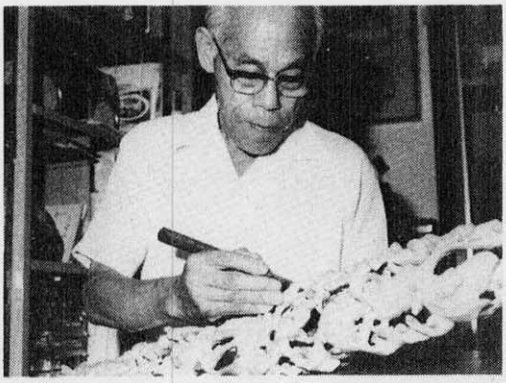
「仏壇彫刻の図案は決まりきったものしかなかったんです。いつまでたっても同じものばかりを彫るわけです。それではなしに、自分で絵をかいてみようと思ったんです。」

坂本さんは趣味として仏像も作っている。そんな関係で岡崎市美術協会の会員でもある。

「職人という仕事は苦労の多い割に、報われない仕事なんです。しかし、この道に入ってよかったと思っています。」

七十歳を迎える来年の七月には、個展を開いて心機一転したいと、ますます張り切る坂本さんである。

〔生年月日　大正四年七月二十三日
住　所　岡崎市北本郷町下寄十一の五〕



教材とかかわらせた掲示を

矢作南小学校　石川　春次

「あ、これ雨が降った時に着る昔のかっぱだ。」

「へんな鍬。木でできとるぞ。」

「この字読めるよ。新堀、東本郷……。」

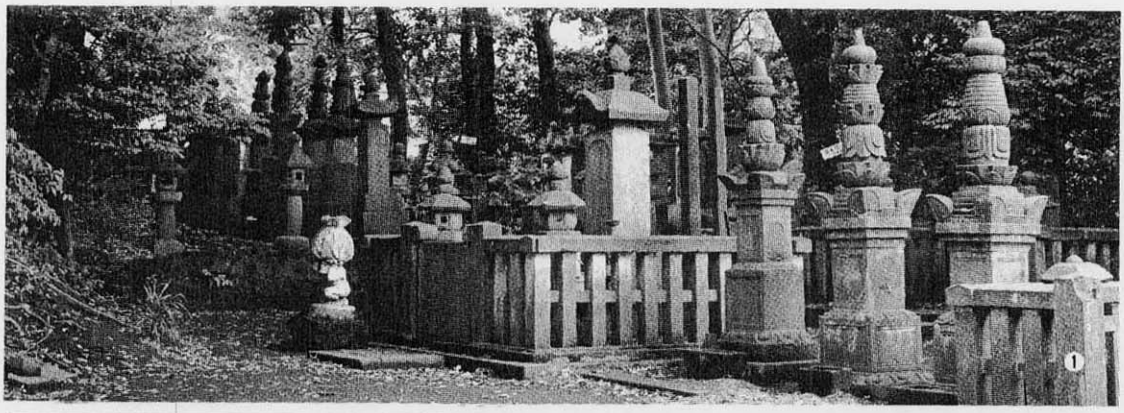
登校したての子どもたちが背面の掲示板に展示した蓑、間縄、木鍬、拓本などを指さしてわいわいやりだした。展示物は、社会科単元「郷土を開く」を前にして用意したものである。学区を流れる「北野用水」の開発に尽力した本多又左衛門に焦点を当てて、地域の開発に尽くした先人の努力や工夫を理解させようという意図からである。

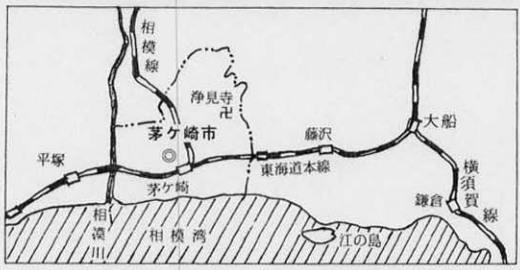
拓本は、又左衛門の顕彰碑の碑文である。通学路にたつ碑だが、日ごろは関心をはらう子もいない。それが、この掲示をきっかけに興味を示し、ひとり調べを始めてくれた。おかげで学習が深まった。

教材とのかかわりを持たせて私がよく掲示するものに、新聞や雑誌の切り抜きがある。振り仮名をつけておけば、子どもは読んでくれる。優秀ノートの掲示もその効果は大きい。

「掲示は学級経営の顔だと思え。」新卒のころの先輩の言葉が思い出される。

台紙をつけたり掲示方法を工夫したりして変化をつけたい。常に、そこに生活している子どもたちの息づかいが感じられる動的な教室でありたいと思う。





ゆかりの町を訪ねて
茅ケ崎市
その1

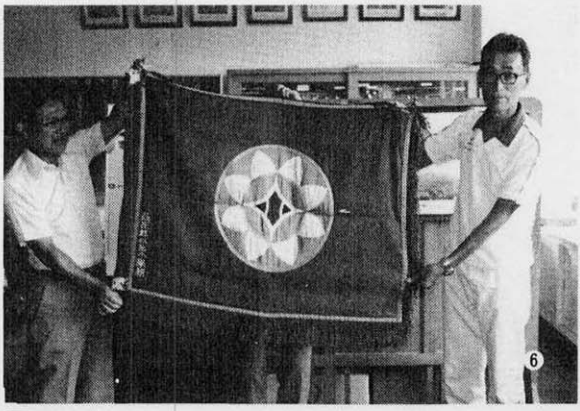
神奈川県茅ヶ崎市は湘南の街。岡崎市とゆかりのまち提携をして一年になる。夏休みの一日、編集子は茅ヶ崎市を訪れた。

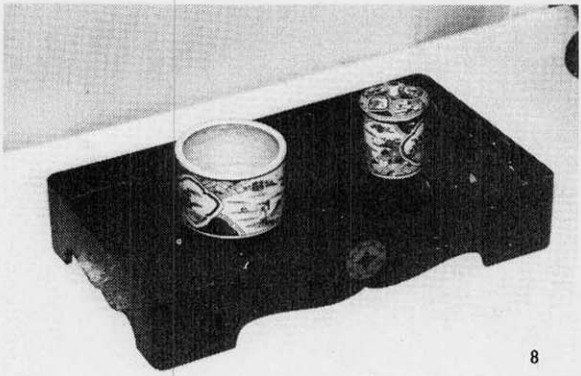
ゆかりは名判官と喧伝された大岡越前守忠相にある。大岡氏は三河出身（安城市大岡）の譜代である。二代の大岡忠政は家康の関東移封に従って江戸に移り、相模国高座郡堤村（現茅ヶ崎市堤町）に知行地を与えられた。忠政は堤村に浄見寺を建立して菩提寺と定め、一族の墓所をここに定めた。

大岡忠相（五代）は延宝五年（一六七七）生まれ。一族である大岡忠真の養子となり、二十四歳で家督を継ぐ。八代将軍吉宗に重用されて、十九年間にわたり江戸町奉行を勤めた。享保の改革推進の中心者で、目安箱の設置、町火消の創設、札差の統制、小石川養生所の創設など、行政官としても敏腕を発揮した。

後年、寺社奉行に昇進し奏者番を兼務して一万石の大名に任ぜられ、陣屋を三河国額田郡大平村（現岡崎市大平町）に構えて西大平藩主となった。

茅ヶ崎市の浄見寺は、今も大岡忠相の遺品を伝え、大岡一族の墓所を守っている。毎年四月には市をあげて大岡祭が催され、墓前祭や大名行列など各種の行事も行われ、茅ヶ崎の春の祭として親しまれている。





① 大岡家一族の墓所。初代忠勝より十三代までの墓など約六十基が整然と並ぶ。中央の垣をめぐらしたのが越前守忠相の墓。

② 忠相の像。清廉潔白、剛毅にして果断、篤学賢明、加えて細心熟慮の人であったと世評は伝える。（浄見寺蔵）

③ 忠相自筆の処世訓。「宝とする所は惟賢なり」とよむ。高い識見を求め勉励努力した忠相の姿勢がうかがわれる。（浄見寺蔵）

④ 大岡家の菩提寺、窓月山浄見寺。

⑤ 墓所にそびえるお葉つきイチョウ。葉上にギンナンの生る変種で、二代忠政が植えたと伝える。県天然記念物。

⑥ 大岡家の家紋「大岡七宝」をあしらった校旗。終戦ころまで地元の小出小学校が使用したものという。右は、ご説明いただいた校長先生。

⑦⑧ 忠相の使用した膳椀と煙草盆・湯呑。（浄見寺蔵）

⑨ 浄見寺の六臂弁財天座像。忠相の守護仏と伝える。県重要文化財。

⑩ 大岡祭で市内を練り歩く大名行列の奴さん。今春、岡崎市の家康行列にも賛助出演している。

話の聞ける子に

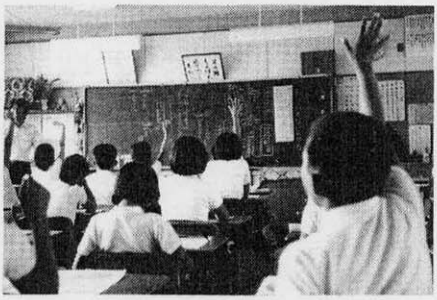
矢南小　塚本　恭代

「先生、お話を読んでくれる。」
「今日は何ていうお話なの。」
毎週金曜日になると、子どもたちは本の読み聞かせを催促する。二回目の一年生担任。前の一年とは違うことを何かしたいと思った。
活動的ではあるが、落ち着いて何事もできない今年の一年生。そこで、落ち着かせるには本の読み聞かせがよいのではないかと思い、始めた。一年間続けようと決め、
「お話を聞いてから、さようならをしようか。」
と提案したところ、全員賛成。毎週金曜日に一つの話を読むという約束をした。
短編で挿し絵のある親しみやすいものから、長編へと段階を踏んで読み聞かせることにした。時間は十五分程度。できるだけ子どもたちが楽しく落ち着いて聞くことができるようにと心がけた。
読んできたなかで、一番好評だったのは、寺村輝夫の『どうぶつえんができた』だった。延延三十分読み続けた。
「ごろん　ごろん　ごろんところがって……。」
という言葉が出てくるたび、大歓声が教室の中に響いた。普段、落ち着いて話を聞けない子どもたちも目を輝かせて聞いていた。
その中で、特に目立ったのがM男だ。いつもM男は、一日中ぼんやりしていて聞く態度も悪い。何が分かったか質問すると、何も言えないことの多い子だ。
ところが、読み聞かせの時ばかりは、一番前で膝を抱え聞き入る子へと変身する。登場人物やあらすじについて質問した時、すらすらと答えるM男に私は驚くばかりだった。
まだまだ、聞く習慣が身につくまでには程遠い。しかし、授業中の話の聞き方は、四月の時よりよくなってきた。読書に対する関心も徐々に高まり、子どもたちから、
「この本は、どこにあるの。」
「この前読んでくれた『トイレにいっていいですか』を読んでね。」
という声が聞かれるようになった。週に一回の子どもたちの楽しみをこれからも続け、話の聞ける子にしたい。

楽しい道徳の授業を

広幡小　山本　信幸

「先生。次の道徳の授業が楽しみだ。」
こういう声を聞くようになったのは、一年前からのことである。教師経験五年目であるが、道徳の時間の授業に魅せられて本腰を入れ始めたのは、昨年のことである。
「授業の基礎は学級作りにある。」
「学級作りは道徳と特活にある。」
「よって、授業の基礎は道徳と特活である。」
この三段論法的発想から考えると、私たち教師は道徳の時間を疎かにせず、週一時間は確実に授業をしなければならない。
「今日の授業はテレビか資料のどちらをやるの。」
「どちらがいいの。」
「どっちでもいいけど、体がうずうずしてくるから、早く授業をしようよ。」
子どもとの会話から、私自身が励まされることが多い。
「主人公のしたことについてどう思いますか。」
「当たり前のことだと思います。そのわけは……。」
「○○君の意見に賛成で私も…。」
「私は○○さんの意見とちがって……。」
毎時間、基本発問は三～四つとしている。主人公の行動を追求する過程で主人公の心情が明らかになると考えているので、基本発問のほとんどは主人公の行動面にしぼっている。子どもたちの多種多様な考えや新鮮な感覚に驚くとともに教材研究不足を痛感させられる。



「ところで、先生はどう思うの。」
「先生は本当にそう思ってるの。」
などと、矛先が教師に向けられることもしばしばである。
「先生も悩んでいるんだ。だから、みんなの意見をしっかり聞いて、先生なりの考えを持とうとしているのだよ。」
子どもたちは本音を言わない、書かないということはなく、授業後の感想もその子なりの考えが明記してある。
しかし、それら道徳の時間の授業を、生活に生きて働く道徳的実践力にまで育てなければならない。授業と生活の場との、目に見えない空間を結ぶパイプが、今の私には見つからない。いや、見えないのである。手さぐりの歩み、そんな毎日である。

おしらせ

【寄贈刊行物・資料等】

◆澪　標　竜美丘小学校
昭和五十八年度・教育実践の記録　B6　一一五ページ

◆焼け跡に立つ虹　愛知県教員組合　B5　二三八ページ

◆研究紀要　第一八集　B5　一八一ページ　新城市教員会・新城市教育委員会

◆読書の記録　校務主任会　B5　孔版印刷

◆岡崎の視聴覚教育　第15号　視聴覚ライブラリー　B5　一〇五ページ

◆峠　第二号　嶋田　稔　B6　五三ページ

全国大会
優勝竜海中男子バレーボール
準優勝　城北中ソフトボール　山中小男子・竜美丘小女子バレー

昭和五十九年度の小中学校各種体育大会が七～八月に各地で開催された。

竜海中男子バレーボール部の全国優勝をはじめ、本市小中学生の活躍が目立った。

■全国中学校選抜競技大会出場

▽バレーボール（8/20～23尼崎）
竜海中男子……優　勝

▽ソフトボール（8/21～22宇治）
城北中……準優勝

▽バスケットボール（8/21～24京都）
城北中男子……第五位

▽陸上競技（8/23～25和歌山）

・男子
八百　寺沢　隆志（南）
三千　岩崎　龍也（竜海）
〃　神谷　栄樹（矢作北）
三種　細江　孝久（福岡）
〃　前島　浩二（矢作）
三種走幅跳　木村　毅（美川）
砲丸投　本多　孝（美川）
〃　福田　英久（矢作北）

・女子
百　中村由貴子（甲山）
〃　谷山　和美（甲山）
三種走幅跳　清水　貴世（福岡）
走幅跳　石川ひろ子（矢作北）
走高跳　鈴木　里香（岩津）
決勝七位

▽水泳競技（8/21～23米子）

・男子
百・二百自　岩附　宣人（矢作北）
百決勝七位
二百自　鈴木　歩（城北）
バタ　二百決勝七位
二百平　落合　祐次（矢作）
四百R　矢作北

・女子
二百バタ　稲垣里栄子（矢作北）
二百平　井川　明美（竜海）

■全国小学校バレーボール大会

・山中小男子……準優勝

・竜美丘小女子…準優勝

■東海中学校総合体育大会

▽バレーボール
竜海中男子……優　勝
竜海中女子……優　勝

▽バスケットボール
城北中男子……優　勝

▽ソフトボール
城北中女子……準優勝

▽陸上競技

・男子
四百　木村　毅（美川）第四位
百十H　宮地克典（城北）第四位
三千　神谷栄樹（矢作北）第五位
砲丸投　福田英久（矢作北）第五位

・女子
百　谷山和美（甲山）第二位
走幅跳　清水貴世（福岡）第二位
〃　石川ひろ子（矢作北）第四位

■愛知県中学校総合体育大会

○優勝
竜海中男子バレーボール
城北中女子ソフトボール
城北中男子バスケットボール

・陸上競技
木村　毅（美川）四百
福田英久（矢作北）砲丸投
鈴木里香（岩津）走高跳

・水泳競技
井川明美（竜海）二百平

第37回岡崎市中学校市長杯総合体育大会兼西三河中学校選手権大会岡崎・額田支所予選会結果

種目	性	優勝	2位	3位
軟式野球	男	六ツ美	城北	竜海・額田
ソフトボール	女	幸田	葵	城北
ハンドボール	男	六ツ美	美川	葵・城北
	女	六ツ美	美川	岩津・新香山
軟式庭球	男	矢作	美川	甲山・幸田
	女	美川	岩津	葵・幸田
卓球	男	幸田	東海	矢作・幸田南
	女	竜海	幸田	矢作北・南
バレーボール	男	竜海	葵	矢作北・幸田
	女	竜海	矢作北	六ツ美・南
バスケットボール	男	城北	岩津	竜海・矢作北
	女	美川	葵	矢作北・幸田
サッカー	男	福岡	南	岩津・附属
剣道	男	額田	矢作	常磐・幸田
	女	幸田南	美川	矢作北・幸田南
柔道	男	美川	竜海	
体操競技	男	竜海	東海	甲山
	女	竜海	美川	南
陸上競技	男	南	美川	六ツ美
	女	福岡	美川	城北
水泳競技	男	矢作	矢作北	幸田
	女	矢作	竜海	甲山

市長杯総合成績

	優勝	準優勝	3位	4位	5位	6位
男子総合	竜海	矢作	矢作北	美川	城北	六ツ美
女子総合	美川	矢作北	竜海	六ツ美	葵	岩津
男女総合	竜海	矢作北	美川	矢作	六ツ美	葵

昭和59年度岡崎市小学校球技大会並びに水泳競技大会成績

種目	性	優勝	2位	3位
ソフトボール	男	井田・細川		根石・六名
	女	山中	細川	常磐南・連尺
バレーボール	男	山中	六ツ美南部	竜美丘・梅園
	女	竜美丘	城南	岩津・井田
バスケットボール	男	大樹寺	城南	井田・連尺
	女	愛宕	井田	城南・男川
サッカー	男	福岡	大樹寺	上地・細川
水泳競技	男	矢作南	矢作北	大樹寺
	女	附属	大樹寺	大門

点「宝塔さま」

所在地—岡崎市矢作町羽城

矢作東小学校入り口の旧東海道筋に高さ五～六メートルはある見事な題目石がある。今から百五十年ほど前の文政十一年七月一日の洪水で溺死した十数名の人々の供養塔で、「宝塔さま」と呼ばれ親しまれている。

記録によると、この時の集中豪雨は物凄く、夕刻に降り出して翌日午後四時にはすでに堤防を乗り越していたという。大まがり付近が決壊し、濁流が民家を次々と押し潰していった。

塔建立のいきさつは、日蓮宗の一行者が道中でこの惨事を目撃したのが発端である。彼は諸国を行脚して供養塔建立の浄財を集め、本山に願い出た。

宝塔の文字は身延山五十八代管長日環上人の筆によるもので、宝塔の入魂式には甲州から管長自らが出向いて法要をしたという。一行者の熱意が本山を動かし、その好意が地元や藩を感動させてこの立派な宝塔建立のはこびとなったのである。

毎年岡崎円頓寺によって法要が営まれるが、昭和五十三年には百五十回忌の大法要が盛大に行われたということである。

「立派な題目石ですね。このへんでは見たことがない。」と言ったら、「日本一だよ。」とお世話人さんの言葉が返ってきた。

● カット　六ツ美中　長坂　有里乃

この本を

＊おじいさんの日和下駄　永　忠順
文化出版局　1200

＊君よ朝のこない夜はない　扇谷　正造
講談社　1000

＊子どもの思考力　滝沢　武久
岩波新書　430

＊箱根の坂（上・中・下）　司馬遼太郎
講談社　各1200

＊愛深き淵より　星野　富弘
立風書房　700

著者の「花の詩画展」が先月レオ催事場で開催され，多くの人が鑑賞し感銘を受けた。

体育教師としてクラブ活動指導中，空中回転に失敗，以後，四肢麻痺，機能回復の見込みなしという重度障害の身となった。

しかし，障害との闘いの中で詩画に楽しみを見出し，筆を口にくわえて描くまでにいたった尊い記録である。

オアシス

思いたって、夏休みのある日、京都へ車をとばす。約二時間半後、竜安寺の方丈の縁に腰を降ろす。石と砂の中の静寂。井上靖は、若き日、この石庭と「魂を売り渡すほどの」出会いをしている。そんな感激は望むべくもないが、大人でも、子供でも、「憩いの場所」がほしいものである。

湘南海岸の茅ヶ崎市を訪問した。相田教育長さんを始め、教育委員会の諸先生方のご親切を受ける。恐縮。

ゆかりのまちとはいえ、知らぬことばかり。東京まで一時間の距離。明澄、清新な街であるが、住宅都市として膨張する悩みも大きいとのこと。知ることは見ることから始まるとあらためて知る。

新しい試みとして社会科学習交流をはじめた。中央高地の学習後、生徒全員がその疑問点をゆかりの町「臼田」の友に手紙を通して尋ねた。

臼田中学校の友は一つ一つの質問に丁寧に答えてくれていた。

「教科書よりもわかりやすいや。先生、北海道の時もできる？」

スズムシの声を耳にした。虫の鳴き声には、どことなく哀愁を感じる。

中学三年の生徒たちは、この虫の声に負けまいと精一杯努力をしているであろう。

目標達成のためには、虫の声に季節を感じとるくらいのゆとりがかえって必要なのかも知れない。